

平成二十六年五月二十六日

タイは遂に、國軍の、クーデターによる政權奪取の事態となりぬ。タクシン派と反タクシン派、赤シャツ派と黄シャツ派の對立抗争は、話合ひ、和解の餘地少く、タイの政治にありては、かかる事態とならば、時の氏神たるべきプミボン國王、御年齢、御健康により、昔日の如き役割を期待申し上げる能はざる今日、國軍の出動以外に、事態の收拾を圖る手段無きは明白なれば、國軍の出動は當然のことにして、むしろ遲きに失せりと云ひつべし。但し國軍出動の遲かりしは、事前にアメリカの諒承を得る要ありし故なるべく、クーデター後のアメリカ政府の反應、穩當なれば、國際輿論なるもののクーデター批判、一定限度内に抑制せられ、事態は鎮靜に向ふと豫想せらる。さすれば、タイとタイ國民にとり、また日タイ關係にとり、望ましきことならむ。

タイの、近時の情勢を理解せん、我らが日本の一九七〇年代初めの、田中角榮と福田赳夫の對立より、類推するを得べし。タクシンは田中に比すべく、選舉を実施せば、タクシンとタクシン派の優位は、動かす可からず。一九七〇年代初めの時期、自民党内の黨員の選舉に於て、田中の優位にありしが如し。對して反タクシン派は、良識派なり。曾て田中と福田、自民党内の選舉により、總裁を争ひたる折、歴代首相、黨幹部等、自民党内のみならず、世の良識派は、舉りて福田を支持せるを想起す。田中を支持せるは、當時長持にて運び込まれたる五億圓のゲンナマにて、田中に靡けりと噂せられし中曾根等の少數幹部はあれど、多くは、黄金の力により、眼を眩ませられたる若き黨員、及びこれも金力にて買収せられたりと云はれし若き政治記者等なりき。タイのタクシン亦、金權政治家なりと批判せらる。タクシンの、携帯電話事業により、巨萬の富を積み、それを政治活動に利用せるは、周知の事實なり。反タクシン派は、タクシン派が選舉の得票、専ら金力により、掻き集められたるを非難す。またタクシンの政治活動にいかかはしき點多く、政治活動に因りて、利を圖るとの批判あるは事實なり。されどタクシンは、もともと成功せる企業家にして、資金力の根源は、正常なる企業活動たる携帯電話事業より、獲得せる富力なり。田中の、正常なる企業活動は、年長の妻の會社たりし田中土建のみにして、富の大半を、専ら政治活動より得たと、やや異なるにあらずや。

我タクシンと、面識ありて、ある時、相當時間に互り、話しせることあり。田中とも昔、面識ありき。田中の、自民黨總裁就任直前までの祕書、後の田中首相祕書官、早坂某の前任者は、今は故人となるも、わが敬愛せる先輩なりき。この祕書、田中の首相就任直前に、後に「越山會の女王」と呼ばれたる愛人の一人と關係を斷つべく進言し、容れられずして辭任せるは、政界周知の事實なり。かかる關係より知りたる田中とタクシンを比ぶるに、我に、好惡の偏向あるべきも、田中がいかかはしきは、タクシンより甚し。我が知れるタクシンは、田中に比ぶれば、かなりまともなる人物と覺ゆ。されどタクシンの政治力は、畏怖すべきものあり。プミボン國王に、萬一のことあらば、次期國王に即位する蓋然性高きは、ワチユラロンコン皇太子なり。こ

の皇太子は、我が秋篠宮殿下と親交深きも、プミボン國王の、謹嚴實直にして、政治的識見を國民より尊敬せらるると異なり、勉強嫌ひの遊び好き人物にして、渠が遊興資金は、タクシンが提供すとぞ。かるが故に次期國王の世とならば、タクシンの影響力は、宮廷内にも及ばん。さればタイの良識派にとり、プミボン國王ご存命の今日こそ、タクシンの力を押さへ、政治に於ける良識を守るほば最後の機會なれと、思ひ詰むるはむべなり。

田中角榮の自民黨總裁に選ばれ、首相に就任せるより後、日本の政治に何が起こりたるや、我らよく識れり。田中の長く政界の實權を保持し、田中後は、金丸、竹下、小澤等の後繼者・實力者となりて、田中が政治手法、即ち政治家の多數を聚め、黨と政府の要職を占有して、政府豫算と建設會社より資金を稼ぎ、建設會社社員を政治家事務所補助要員として派遣せしめ、稼ぎたる資金にて、政治家若手、官僚、記者らを懐柔するは、政治の常套手段となる。田中が悪辣なる資金稼ぎ、例へば國有河川の河川敷内の土地を、職權もて河川敷外に指定換へし、豫め買占めたる河川敷内の土地を轉賣して巨利を得る、建設豫定の新幹線等の鐵道、高速道路等の、路線、インターチェンジ等の位置を、職權もて知るや、配下の不動産業者に令して、周邊の土地を買占むる等の方法、政界に熟知せらる。斯くて、田中派を中心に、事前に公共工事關係極秘情報に接し得るポストに就任せる代議士ら多數、之を踏襲す。公共工事、ODA援助等に關與し、自らの手中に、國家豫算の一定比率の資金を流入せしむるは、田中系等の政治家の常例となれり。こはジャーナリズムのほぼ報道せざるにより、國民一般には知られざるも、政界、建設業界等にありては、公然と、あからさまに行はる。あからさまなりしが故に、對中國ODA援助に係る日本政治家の利殖行動の、中國側に見透かさるる所となり、その頃未だ比較的純眞なりし中國政府關係者の輕蔑を招く。一部の腐敗せる中國側政治家・官僚ら、之より、政治的決定權を金に換ふる術を學びたるは、何たる皮肉ぞ。又こは、我らが國の恥に非ずして何ぞや。

斯る田中派系政治家の腐敗、今は漸く、ほぼ拂拭せられたり。そは、一に竹下と金丸・小澤の、竹下派内部の分裂・抗爭、二に竹下派外の、小泉、加藤、山崎のYKK、之を批判せる、三に竹下が死後、YKKの一人、小泉の舊福田派系政權の成立せるに因る。されど田中が首相就任より竹下が死まで、二十八年の歲月の間、日本の政治は、腐敗と不効率化の一途を辿れり。今日の日本經濟、いかに景況の不調に苦しむも、思ひ切つたる景氣刺激策を採り得ざる、國民の老齡化進みたるも、有效なる社會保障制度の未だ確立せざる、消費税増額により國民の生活を壓迫したる、何れも國の財政に、巨額の缺損赤字の累積せるが故なり。然して累積せる財政赤字、何處より來たりしや。遠因を探らば、田中系等の政治家の、長年に亘つて國家財政に寄生し、財政資金より、ほしいままに個人的資金稼ぎに狂奔したる、少くもその一つなりしを疑ふ者無からん。

田中角榮なる政治家の登場せる時、政界の良識派に、田中の危険性を察知したる者、少からざりき。田中の「留置所の壁の上を歩く男」と評せられたるは、そが證左なり。されど當時の朝日新聞等のジャーナリズム、全面的に田中を支持・支援し、田中が政治活動の暗部を、ほ

ば完全に、國民の眼より隠蔽せるが故に、國民の大多數、亦田中を支持す。田中が國民的人氣、世を覆へり。いかがはしき政治家、田中を首相の地位に押し上げ、その後三十年近くに互りし政治の腐敗と低迷をもたらしたるは、ジャーナリズムなりしに非ずや。福田赳夫等の良識派、ジャーナリズムの支援を得る能はざりしが故に、日本の政治の轉落に向ふを阻止し得ざりき。我らが日本、今日のでいたらくにあるは、一九七〇年代初めの、ジャーナリズムと國民の選擇の誤りに基づくならずや。

タイにては、國內に、日本の如きジャーナリズムの偏向、尠しと見ゆるは、彼の國の幸ひなり。タイのジャーナリズムの多くは、良識派とともに、タクシンの、選舉による多數獲得に藉口して、政治の實權を獨占せんとするを批判せるらし。されど問題は國際輿論なるものを形成する歐米人記者等なり。固より歐米人記者が中に、アジアの政治文化に理解ある者、絶無には非ず。されど大半は、歐米の規準を絶対視し、文化的、人種的偏見を毫も恥ぢず、歐米外の如何なる地にありても、居丈高に、歐米的選舉制、代議制ならずば、「民主主義」に非ずと做し、就中軍事政權を敵視、非難するが常なり。今般アメリカ政府は、事前に諒承せる故か、軍の、選舉多數派排除の動きを、早期の、選舉制への復歸を要望しつつも容認す。されどアメリカ等のジャーナリズムの反應、如何ならむ。常の如き、アジアの政治文化に理解なき一方的非難の、抑制せられんことを切に庶幾こひねがふ。アジアには、アジアの政治文化あり。「民主主義」なる言葉の定義如何によれど、タイならば、タイに固有の民主主義的政治文化ありて、長き歴史に根差せり。今回の如く、歐米式選舉制のタイの良識を逸脱せば、國王の藩屏たる軍の介入して、それを是正するが、タイ固有の制度なり。そは、歐米式「民主主義」の制度とは異なれど、實質的に民の利を守れば、民主主義の原理に反せず。今回タクシン派の過度の勢力、軍主導の下に抑制せられ、數の原理のみに據らざる制度の模索せられ、さらに實行に移されば、そは、社會、人心のあり方に共通點無きに非ざる我が日本にも、よき「他山の石」たらむ。願はくは、田中角榮以後の日本の政治の歸趨を、批判的に回顧し、現下の日本と日本の政治の再生に取組む良識派我が國人、或いは假令平素「王より王黨派」となりて、歐米人以上に歐米的規準を信奉し、軍事政權を非難する日本のジャーナリズムにありても一部人士、今後のタイが政治の推移を、眞摯に注視せられんことを。